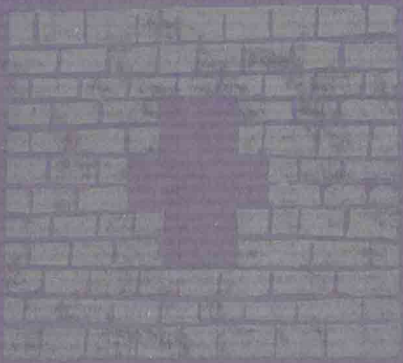

たいわん物語

邱永漢

中央公論社

たいわん物語　検印廃止
©一九八一
定価一二〇〇円
昭和五十六年七月十日初版
昭和五十六年八月十五日再版
著者　邱永漢
発行者　高梨茂
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二一三四

たいわん物語＊目次

雨の台北　7
翁小姐（オング・シャオチェ）の持参金　40
オンリー三代記　77
北投（ペイトウ）温泉の夜　111
台湾慕情　130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小姐東遊記（シャオチエ） 173
おしどり太平記 213
奴隷婚 259
連休の一等客 302
アニマル綺譚 326
あとがき

裝幀

山

高

登

たいわん物語

雨の台北

台北というと、どういうわけだか、いつも雨を連想する。あれだけ何年もせっせとかよったのだから、よく晴れた日もたくさんあった筈だが、何か肝心なことのある時は、いつも雨だったのである。

柏原がはじめて安安(アンアン)にあったのも、小雨のそぼふる日だった。台北は冬が雨期である。台湾としては寒い季節で、日本から行った人にオーバーは不要だが、ホテルに暖房設備がないことと、雨が何日でも音もなく降り続けるので、気分が塞いでくる。

殊にあの晩は、籐製品の買付けのために打っておいた手付金をブローカーに持ち逃げされたことが判明した直後だったから、いつになく気が動顛(どうてん)していた。柏原は横浜の郊外でちょっとした

大型家具屋をひらいている。籐製家具がボツボツ流行しはじめてよく売れ出したが、柏原の店では他の家具屋から仕入れていたので、何とか直で輸入する方法はないものかと自分でのこのこ台湾まで出かけて行った。台湾は前に一ぺん招待されてきたことがあるが、知人といえば、その時に案内してくれたガイドくらいなものである。日本語も通ずるところだし、行けば何とかなるだろうと考えて、事前の調査も紹介状も持たずにやってきた。

ガイドの蔡君は親切な人で、柏原が予め手紙を出しておくと、飛行場まで迎えに出てくれ、籐製品なら知っている人が貿易をやっているから、その人を紹介しましょうと云ってくれた。連れて行かれたところは、士林の籐椅子屋のたくさん並んだところではなくて、南京東路の路地裏を入ったビルの四階であった。貿易商の看板がかかっているが、どう見ても籐椅子屋さんではない。柏原がこれじゃ駄目だと云うと、

「いや、この人は南部に大きな籐椅子の工場をもっていて、アメリカに輸出しているから大丈夫ですよ」と云う。

通されたところは、二間だけの、従業員が四、五人といった小さなオフィスで、籐製品のサンプルは何一つなかった。しかし、董事長の名刺をさし出した貿易公司の主人は、

「私の義兄が台南で工場をやっていて、私もそこの株主をやっています。ご都合よかったら、明日にでも工場へご案内致しましょう」

と自信たっぷりだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柏原はせっかちな性だから、すぐ翌日の飛行機で台南に案内してもらった。なるほどききしにまさる大きな工場である。製品の出来はあまりよくなかったが、小学校を出たか、出ないくらいの子供が何百人も働いていて、かなりの量産をしている。工場の董事長と貿易公司の董事長は身内らしく、柏原がこっそり「本当にこの人があなたの輸出代理をしているのですか？」ときいたら、「古くからのつきあいですからね、大分、やっていますよ」という返事だった。「でも、このままの製品じゃ、アメリカでは通用するかもしれないが、日本では駄目ですよ。もっと品質管理がきちんとしていないと」と云うと、「指導員をよこして下さい、どんな要求にも応じますよ」と至って低姿勢である。

これなら間違いなかろうと安心して、台北へ帰ってから、貿易公司の董事長と商談をすすめた。価格の交渉をし、数量をきめ、では日本から信用状を送りましょうという段階になってから、実はいますぐ定金を払ってもらえないかという話がとび出してきた。アメリカから大量の注文があって、向うが先になると、こちらの注文を生産ラインにのせるのが後廻しになるから、ことしの夏には間に合わなくなると云う。アメリカから台湾に大量の注文が入っていることは、日本にいる時にもきいていたし、台南の工場でもきかされたから、はじめての取引でしかも千万円か、千五百万円くらいのていどでは立場が弱いことも事実である。ちょうど来る時に、こんなこともあろうかと思って、二百万円ばかり用意してきたので、その金を定金として支払った。二百万円分をさしひいた金額の信用状を横浜へ帰ってから、ひらく約束をし、事実、その通り実行したのだ

が、それっきり連絡がとだえてしまった。
どうしたのかといぶかりながら、台北へ来て見ると、貿易公司はもう店じまいをしていて、董事長も事務員もどこかに消えてしまっている。あわててガイドの蔡さんを呼び、台南の工場にも連絡してもらったが、自分のところは注文をもらっていないと云うし、今からでは夏に間に合わせることもできないと素気ない返事である。あの人はおたくの株主じゃないのですか、とききかえすと、とんでもない、あの人はただのブローカーですよ、貿易会社なんて机を二つもおいておればできるもので、あんな人が何で私の会社の株主ですか、ととりつく島もなかった。単純な定金詐欺で、こちらは信用状をひらいているのだから、粗悪な品物を送り出してついでにあとの金も詐取しそうなものを、そこまではしてなかったのがせめてもの救いであった。しかし、考えてみれば、こんな単純な詐欺にひっかかるこちらもよほどどうかしている。
柏原はガイドの蔡を頭から怒鳴りつけた。蔡は頭を地につけんばかりにして謝り、どんな罪にも服する、警察にも一緒に行く、と云う。また本人を必ず探し出して金をかえしてもらうから、もう少し待ってほしいとたのむ。事件が起ってからずっとつきっきりで、台南の籐工場と交渉した経過を見ても、蔡が相手とグルになっているとはちょっと考えにくい。蔡は人柄もいいし、正直すぎて、向うに一杯食らわされたとしか考えられないのである。
「柏原さん。一つ気晴らしに飲みに行きませんか。ご迷惑かけましたから、今夜の勘定は私がもちます」

気のすすまぬ柏原の手をひくようにして、蔡は雨のふる中山北路（ツォンシャンペイルー）にとび出した。タクシーに乗るには近すぎ、歩くにはちょっと距離があったが、柏原が歩くと云ったので、雨よけの停仔脚（ティンアーカー）を、ところどころ雨に濡れながら、陸橋のすぐ脇の宝島西餐庁（パオタオシーツァンティン）と書かれた店まで歩いた。そこに安安がいたのである。

西餐庁（シーツァンティン）とは西洋風のレストランのことである。台湾では、風俗営業の店は遊興税を三五パーセントもとられるし、コーヒーだけを売る店は許可しないので、おさわりバーのようなところでも、ゲイバーのようなところでも、皆、レストランという看板が出してある。コーヒー店のコーヒーが一杯三十元なのに、こういう地下営業の風俗喫茶では一杯百元もとる。また最低カバー・チャージがあって、百五十元とるところもあれば、二百元とるところもある。それでも酒家のように五千元も八千元もとるところに比べれば、うんと安上がりだし、一人旅の日本人にとっては好適の猟場と云ってよいだろう。

但し、表向きはあくまでもレストランだから、ドアをあけて入っただけでは、コーヒーと軽食の出てくる普通のしょぼくれたレストランにすぎない。それが蔡のような顔見知りが案内してくると、目くばせ一つで、うち側から鍵の閉められた扉がひらかれて、「どうぞ」と階下へ通されるのである。

安安はこの地下クラブのナンバーワンだった。背は低く、骨組はほっそりしているが、顔はぽっちゃりして、

「安安です。ドウゾヨロシク」
と笑った時の口元が何ともいえず可愛らしかった。
柏原は元気がなかった。とられた金は、商売にひびくような額ではないのだが、コロリとひっかかったのがどうにも癪にさわってならないのである。
「どうしました？　考え事ですか？」
と安安がきいた。
「この人は、台湾の人に金をだましとられたのですよ」
と蔡が説明した。
「まあ、たいへんね、一体、いくらだまされましたの？」
「台湾のお金で二十五万元」と蔡が代わりに答えると、
「台湾、悪い人多いね。あなた、気をつけないと駄目ですよ」
と安安は大きな目をパッチリ見ひらいて、ニコリと笑った。
「でもクヨクヨしないで。二十五万元くらい、またもうけたらいい。柏原さん。お酒をどうぞ。お酒のんで悪いことは忘れましょう」
ウイスキーのグラスを手にとって催促されると、柏原もグラスをあげざるを得なくなり、酒を飲むほどに少しずつ機嫌がなおってきた。
クラブのなかは結構、混んでいた。安安はお客に人気があると見えて、あちこちからお呼びが

かかる。彼女が席を立ったすきに、蔡が柏原に、「あの子はどうですか」ときいた。
「いい子だな。でも承知するだろうか？」
「承知しますよ。お金次第ですから」
「いくら払えばよいのかな？」
「今夜は私のおごりですよ」
「まさかそこまでしてもらうわけには行かない。一体、いくら払えばよいのかね？」
「今夜は柏原さんは心配しなくて結構です。私のおわびのしるしですから」
「でもそれはいけない。とにかく、払う払わんは別として、相場はどのくらい？」
「こういうところの人は千元が相場で、あとのチップはお客さま次第です。ですから、今晩はチップの方だけもって下さい。オネンネの方も払うと二重払いになりますから、わかりましたね」
「じゃ、そういうことにしようか」
現金なもので、柏原は俄かに元気になってきた。安安の方は、そんな会話が交わされているとも知らず、ほかの客の需めに応じて、ピアノの前に立って、マイクを片手にとって、
〈あなた一人…に…賭け……た恋……
歌い出したのは「長崎は今日も雨だった」である。そして、柏原の方を向いて、満面に笑いをたたえたままウインクをした。地下室まではきこえて来ないが、柏原は外で雨がふっていることを思い出していた。

柏原が台北に「箱根」という日本料理屋をひらいたのは、それから間もなくのことであった。台湾では日本人が社長になって小売店や料理屋は経営できないので、陳安安が名義上の社長になり、またママさんになって一切をとりしきることになった。

家具屋が本職で、水商売などやったことのない柏原が突然、日本料理屋をひらくことになったのは、安安の歓心を買いたいと思ったからであるが、実は安安が柏原のだましとられた金をとりかえす交渉をしているうちに、日本料理屋をおしつけられるめぐりあわせになってしまったからであった。

彼女は見かけによらぬしっかり者で、柏原が金をだましとられた経過をきくと、貿易会社の董事長の引越先をさぐり出し、「もしちゃんと後始末をしなければ、詐欺事件として警察に訴える」と云って相手をおどかした。相手もそれほど悪人ではなかったと見えて、実は第三者と共同経営で、六条通りに「箱根」という日本料理屋を経営していたのだが、業績が思わしくなく、とうとう倒産してしまった。借金もあるけれども、権利もあるから、経営権が売れるまで待ってもらいたいと云う。共同経営者が三人もおり、権利と云っても店の造作とのれんだけだから、売っても大した金にならないし、売る売らないで三人の意見も一致しない。権利が入りくんでいて、柏原は面倒くさがったが、安安は執拗に食いさがって、

「とにかく、日本料理屋の商売は決して悪くなかったのですよ。仕入れをごまかされるからもう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com